

# ふるさとの 植物を守ろう

## 植物園と市民で進める 植物多様性保全ニュース

Janan Association of Botanical Gardens

社団法人日本植物園協会

### 市民と植物園で進める

### 絶滅危惧植物保全への取り組み

日本植物園協会会長 邑田 仁

現在世界中で多くの野生生物が絶滅の危機に瀕しています。生物の生息環境の悪化や生態系破壊への懸念が深まるなか、1992年に「生物多様性条約」が採択、2002年には生物多様性条約締約国が現在の生物多様性の損失速度を2010年までに顕著に減少させるという「2010年目標」が定められ、世界中でさまざまな施策が講じられています。そのとき採択された「世界植物保全戦略」では「絶滅危惧植物種の60%を利用可能な状態で生息域外において保全し、それらのうちの10%を種の回復・復元事業の対象とする」ことが目標の一つに挙げられました。

こうした国際的な動きも背景に、1992年に日本植物園協会では「絶滅危惧植物対策委員会」を発足させ、加盟園の協力を得ながら生物多様性保全への取り組みを実践してきました。現在は「植物多様性保全委員会」と改称し国際的な指針に従いながら多岐にわたる活動を行っています。

一方、社会からの要請として生物多様性保全は植物園の重要な役割の一つであるという声が高まっています。多くの機能を持つ植物園は栽培や保存の拠点であると同時に総合的な調査研究も可能だからです。日本

植物園協会ではそうした植物園の責務と社会要請に応えるため、植物園での生息域外保全ばかりでなく、行政や研究組織、市民団体等と連携した幅広い保全活動を進めています。

その一つが2006年にスタートした植物多様性保全拠点園ネットワーク事業です。全国の植物園の気候や地域性、専門分野等の特色を活かし、市民や諸団体と互いに力を合わせることで植物保全を効率よく連携して推進するシステムです。

もともと植物園では、研究資料や将来の遺伝子資源、展示などさまざまな目的から生きた植物を収集して系統保存を行い、その蓄積が絶滅危惧種保全にもつながってきました。しかし、植物園＝保全活動、という認識が常になされてきたわけではありません。個々の植物園での実践例はありますが、日本の植物園総体としての保全活動が認められてきたのは意外にも最近のことです。

具体的な形としては、環境省「第三次生物多様性国家戦略」(2007)に、植物園および当協会の役割が記されたことが植物園における生物多様性保全活動が公に認められた端緒といえましょう。また、「絶滅のおそれのある野生動植物種の生息域外

保全に関する基本方針」(2008)では、環境省と日本植物園協会が連携を図り、生息域外保全を実施することが書かれ、植物園の位置づけが明確になってきています。

2010年は、国連が定めた「生物多様性年」という重要な節目です。当協会では次の二つを2010年までの大きな目標とし、市民と力を合わせ、目標達成を目指します。

- 日本産絶滅危惧植物種の55%を日本の植物園において保有する
- 日本産絶滅危惧植物種の45%は自生地情報の明確な個体を保有する

現在、日本には約7,000種類の維管束植物(種子植物、シダ植物)が生息していますが、2007年の環境省レッドリストには絶滅危惧植物が1,690種類も挙がっています。これらの植物は私たちの手で守っていかねばなりません。

我が国では、以前から市民が植物の栽培方法や地域植物相の解明に尽力して豊富な知識を蓄え、植物誌やレッドリスト作成の主役になっています。その市民と植物園が互いの長所を活かして相補的に協力し、より良い保全活動が継続していくことを期待しています。

## ◆ニュース◆

### 野生絶滅種コシガヤホシクサ ～野生復帰にむけ現地での発芽・開花に成功～

国立科学博物館筑波実験植物園では環境省と共同で行う「生息域外保全モデル事業」の一つとして、野生絶滅種コシガヤホシクサの野生復帰に向け保全研究に取り組んでいます。その中で、最後の自生地であった茨城県下妻市砂沼においてコシガヤホシクサを種子から発芽させることに成功しました。動物ではトキやコウノトリの例がありますが、植物の野生絶滅種8種（環境省、2007）については、これまで野生復帰が行われたことはなく、成功すれば野生絶滅植物の野生復帰として稀少な例になります。

コシガヤホシクサ *Eriocaulon heleocharioides*（ホシクサ科）は、1994年に最後の自生地となる茨城県下妻市砂沼から消滅し、生息域外でのみ保存される野生絶滅種です。

もともとコシガヤホシクサは、砂沼で長年続いていた水管理方法とよく共存して種を維持してきました。春の発芽前後に水位が上昇したあとの生育期は水中で過ごし、水田へ水供給の必要がなくなる秋頃に水位が落とされると、水上に花茎を立ち上げて開花し種子をつけます。花は水上にないと咲かず種子も作れないうえ一年草であるため、秋に種子が作れないと翌年にはコシガヤホシクサは消えてしまいます。水不足を背景に1994年から年間を通じて高水位を維持するようになったため、世界で唯一の自生地であった砂沼からコシガヤホシクサは絶滅しました。

このように砂沼でのコシガヤホシクサの絶滅は、秋に水位を下げなくなった水管理方法の変化によることが明らかだったため、1993年以前の水管理方法に戻すこと



コシガヤホシクサ *Eriocaulon heleocharioides*  
写真は筑波実験植物園で栽培している株

によって、生息域環境を再現できる可能性がありました。そこで、筑波実験植物園では砂沼の所有者、管理者、利用者に理解と協力を求め、9月中旬から3月末まで水位を下げることに合意いただき、これによりコシガヤホシクサが自生していた砂沼の柳ワンドには、底土が露出する湿地が現れ、野生復帰への土台ができました。その後、砂沼で絶滅する前に採取、保存されていた種子をもとに、砂沼柳ワンドへの播種実験を行いました。

2009年4月28日に、播種実験区に水草の芽生えを確認しましたが、発生初期のためコシガヤホシクサと同定できなかったためDNAの塩基配列を解析し、6月3日にコシガヤホシクサであることを確認、その後、実験区内を詳細に調査したところ、6月17日時点で数百個体が発芽していることが明らかになりました。9月初旬から水位が下がり、9月11日には水上に花茎が伸び開花も確認されました。

引き続き筑波実験植物園では地元の方々の協力を得ながら、コシガヤホシクサの生息域外での長期的保存方法のさらなる検討など、安定した保全のための研究・活動を続けていきます。



2009年4月、砂沼の播種実験区内での発芽した個体の確認調査の様子



砂沼で発芽し開花した個体。花粉も出ているので、1993年以来16年ぶりに結実が見られる可能性が高い



## ◆報告◆

### 沖縄の絶滅危惧植物展

会期：平成21年7月17日（金）～7月26日（日）  
 場所：国営沖縄記念公園 熱帯・亜熱帯都市緑化植物園  
 沖縄県で、絶滅が危惧されている植物約120種を展示し、それらの植物が置かれている現状を写真、パネル等で紹介、解説を行いました。また、絶滅危惧植物の保全活動を実施している財団法人海洋博覧会記念公園管理財団の取り組み、及び沖縄県内の農林高校、国内の植物多様性保全拠点園の保全活動等の紹介をしました。

会場の雰囲気盛り上げるため、山地の林床に生育する希少植物及び道路沿に広がる外来植物



希少植物や外来植物が実際に生育する様子を模した展示風景。熱帯・亜熱帯都市緑化植物園では毎年「絶滅危惧植物展」を開催し、植物保全の普及啓発に努める

等を実際の風景に似せて再現しました。期間中は約1,700人の来園者があり、アンケート等から「沖縄の自然を考えさせられる」、「改めて、沖縄の自然を知ることができた」等のご意見が聞かれ、希少植物の保全の必要性について、再認識してもらえたと思います。

### 新潟県立植物園 絶滅危惧植物展 ～地球のためにできること～

会期：平成21年5月27日（水）～6月28日（日）  
 会場：新潟県立植物園

地球の生物は固有の役割をもちながら微妙なバランスの上で成り立って多様性が保たれています。現在危惧される植物種の絶滅によって私たちの生活にどのような影響が現れるのか、また保全活動や我々にできる身近なことなどを紹介し、生物多様性保全の重要性を意識する契機となるような展示としました。

新潟県立植物園で保有する約80種の絶滅危惧植物を湿地や草地、山地など生育環境別に展示・解説したほか、植物園の保全活動を知ってもらうために環境省の生息域外保全モデル事業で増殖中のオキナグサの実生、保存種子や採集道具等も紹介しました。

期間中約6,200人の来館者があり、アンケート調査からは植物にも絶滅が懸念されているものがあることを理解できたという声が多く寄せられました。今後、来園者の興味を引き、また理解を得るために人間の生活に近い視点を持つことや、子ども向けの展示などを考えていく予定です。



約80種の絶滅危惧植物を生育環境別に展示。オキナグサの生息域外保全モデル事業で増殖中の苗や保存種子等も紹介された

## ◆お知らせ◆

### 特別企画展「大どんぐり展」

地球温暖化、生物多様性保全と持続可能な利用推進など、市民が環境を見直す機会が増えるなか、COP10の名古屋開催も受け、自然との共生に向けた地域づくりが求められています。私たちの生活を支えてきた里山、そしてその中心となる「どんぐり」のなる木を見つめ直す特別企画展です。

期間／2009年9月19日(土)～12月24日(木)

会場／広島市植物公園

URL／<http://www.hiroshima-bot.jp/>

主催／財団法人広島市動植物園・公園協会

※交通アクセス等は、広島市植物公園ホームページをご覧ください。

### 企画展「絶滅危惧植物展」

生物多様性と絶滅危惧植物についてのパネル、生きた絶滅危惧植物、絶滅危惧植物の生物多様性地形図を展示します。また、10月11日(日)13:30～15:00にはケビン・ショート氏(東京情報大学)による企画展セミナー「世界と日本の里山の魅力」が開催されます。

日時／2009年10月3日(土)～10月12日(祝・月)

会場／国立科学博物館筑波実験植物園

URL／<http://www.tb.g.kahaku.go.jp/>

連絡先／TEL 029-851-5159

### 筑波実験植物園・植物園セミナー

「絶滅した水草を野生に帰す」

講師／田中法生(筑波実験植物園)

日時／10月3日(土)午後1時30分～3時

会場／筑波実験植物園研修展示館3階セミナー室

※事前申し込みが必要です。

※詳細は、連絡先・会場にお尋ねください。

### 頒布書籍のご紹介

#### 「日本の植物園における生物多様性保全」

日本、そして地球の生物多様性を守る取り組みのなか、植物園の役割はたいへん重要です。しかし、なぜそれに貢献するのか、これまでどのような活動を行ってきたか、未来に向けてどんな目標を立てるべきかなど、植物園の視点から紹介された日本語による書籍はありませんでした。

日本植物園協会、国立科学博物館筑波実験植物園、植物園自然保護国際機構(BGCI)が2007年に共同で刊行した『日本の植物園における生物多様性保全』は、わが国の植物園における生物多様性保全に関する実績を紹介し、また植物園での保全事業に役立つ情報を取りまとめた、植物保全にかかわる多くの方々に活用いただける実践的な書籍です。

生物多様性保全や植物園活動に関心をお持ちのさまざまな立場の皆さまにとって必携の本書を部数限定で頒布しております。お申し込みは日本植物園協会事務局までご連絡ください。頒布方法については、日本植物園協会ホームページ「出版物のご案内」にもご紹介しております。

なお、本書は一般書店で取り扱っておりません。

■申込方法■ 日本植物園協会事務局宛に、氏名・送付先・電話番号・必要部数をEメール、ファクシミリでお知らせください。見積書等が必要な場合はその旨もご連絡ください。申込みを確認後、2週間以内に発送いたします。



このニュースレターが、植物とその保全に関する情報交換の場の一つとなるよう、工夫していきたいと思っております。各地の諸団体の取り組みもご紹介していきますので、共有したい情報やご意見等を、右記の協会事務局宛にお寄せください。よろしく申し上げます。



編集・発行 社団法人日本植物園協会

〒114-0014 東京都北区田端 1-15-11-201

TEL: 03-5685-1431 FAX: 03-5685-1453

URL: <http://syokubutsuen-kyokai.jp/>

E-mail: [seed@syokubutsuen-kyokai.jp](mailto:seed@syokubutsuen-kyokai.jp)

独立行政法人環境再生保全機構地球環境基金の助成を受けて活動しています